

所属 窪川高等学校

氏名 池上 佳代

RG SH2

【1 研究の背景】

習熟度別の上のクラスで男子3人、女子26人、計29人のクラスである。圧倒的に女子が多く、授業中は真面目に取り組むが、活気には欠ける面を持っている。習熟度別の上のクラスではあるが、能力はそれほど高くはなく、英語嫌いの生徒も多い。

6月の中間考査前にとった授業評価アンケートでは、訳に執着し、教師が1文ずつ訳を言うことを望んでいた生徒が何人かいた。アンケートの結果を提示し、今後の授業のあり方（逐一訳はしない方向）を彼らに説明してからは、あまり以前のような意見は出なくなった。ワークシートを用いた大意把握の授業にもだいが慣れてきたようである。

音読に関しては、4月当初に比べると少しは声が出るようになったが、まだ期待しているほど大きくはない。授業中、生徒の反応があまりなかったり、積極的な発言も見られなかったりするので、クラスにいかにして活気を持たせるかも大きな課題である。

【2 リサーチクエスチョン】

生徒の授業内容理解に繋がる効果的な音読指導をするにはどうすればよいか。

教科書に出ている新出単語や重要な熟語を習得し、かつみんなの前で、自信をもって音読発表できるようにする。

【3 予備調査】

別紙参照

【4 仮説の設定】

- ワークシートを用いた音読やシャドーイングをペアワークで練習すれば、語彙力や本文の内容の理解度も上がるのではないかと。
- 本文内容理解はワークシートを用いて効果的に行い、その分音読練習に時間を当てれば、十分な練習がなされ生徒の自信に繋がるのではないかと。
- ゲームやペアでの活動を取り入れれば、クラス全体の活気につながり、音読練習の際、大きな声で発音しやすくなるのではないかと。
- 音読発表をこまめに評価し、明確な形で生徒に提示すれば、意欲に繋がるのではないかと。

【5 計画の実践】

1学期の反省を活かし、以下のことを実践した。授業の初めにしていたゲームを止めその分を音読練習に当てるようにした。ワークシートを用いた練習から、ペアワークを中心としたシャドーイングに移行した。音読の一斉練習の時に発音リエゾン、強弱等、音読の際のポイントを押さえた。本文内容理解は引き続きワークシートを

用いて効果的に行い、十分な音読練習を確保することを図った。 中間試験の問題に音読用の問題を設けた。

【 6 実践の結果】

生徒のアンケートから音読に関する部分等を抜粋

音読練習に積極的に参加できている (8 0 %)

音読練習等で声を出すことに抵抗はない (5 2 %)

音読練習は英語を勉強する上で役にたつ (7 4 %)

ペアワークは楽しい (7 6 %)

本文内容把握のワークシートは本文を理解する上で役に立っている (8 3 %)

中間試験音読用問題正解率 (8 7 %)

【 7 結果の検証】

音読に対して肯定的な生徒が多く、積極的にペアワークに取り組める等活発な面が見られた。また、1 学期は声を出して発音することに少し抵抗を感じていた生徒が 4 3 % いたのが 2 学期の半ばには 1 4 % まで減少した。これは静かで、あまり反応がなかったクラスから言えば、少し進歩した点であるといえる。2 学期から取り組んだシャドーイングは生徒や日本人教師の後については出来ても、ネイティブについてのシャドーイングはまだ無理な状態であった。クラスでの発表は控えていたせいもあるが、家庭での音読練習は十分に出来ていなかったと思われる。音読練習の成果を評価し、生徒に還元できるシステムをとっていれば、生徒ももっと家庭で練習してきたのではないかと考えられる。中間試験の音読用問題は生徒の能力に応じた内容のものであったので、取り組みと結果は比較的良かった。

【成果と今後の課題】

中間試験以降 2 学期末まで病休で教壇に立てず、計画していたことが実践できなかった。成果より今後の課題の方が多かったのでそちらを中心に書きたいと思う。まず、生徒の音読の評価が細やかに行えなかった事が大きな反省点である。今後は筆記試験のほかにもクラス発表か面接形式での音読の評価を組み込んでいきたい。次に家庭での音読練習及び家庭学習が挙げられる。アンケートの結果から試験期間を除く家庭学習時間はほとんど皆無に等しい生徒がクラスの 9 2 % に上ることが分かった。中には家庭学習の仕方が分からないという生徒もあり、指導の必要性を感じた。また、授業で力を入れている音読指導を家庭でも理想的に行うには、教科書の CD やテープを家庭でも利用させ、ネイティブの発音を耳で聞き、真似る作業が大切である。ネイティブの発音を聞きなれていない生徒にとって、家庭学習で CD やテープを聞き発音練習をすることは 1 0 0 % シャドーイングにむけた 1 つのステップになると考えられる。その他にも、放課後を利用した学習の支援も方法も挙げられる。学校の機材を生徒に提供し、生徒自ら練習し、必要に応じて教師が指導に当たるといったものである。来年度はこういった点を踏まえながら、授業と授業以外の自主学習と評価の一体化を目指して取り組んでいきたい。